

伊賀上正俊教授を送る

第一部

朔北の抒情と新天地のロマン

木村 真佐幸

一 漂泊のエレジー・フロンティア・スピリット

札幌大学開学の昭和四十二年四月、東京から赴任された伊賀上正俊先生がこの三月で定年を迎え退職された。

北海道での生活二十五年——まさに四半世紀である。専攻分野は、伊賀上先生が古典、私が近代といっても同じ国文学ということだ。公私共々ご指導、ご交誼にあずかっただけに感無量である。まずもって深甚なる敬意と感謝を捧げる次

第である。

本学も二十五年の足跡を刻み、四学部、一短大九学科、卒業生も二万五千余、今年度の入学志願者も一万五千、競争率も結構厳しい大学に成長発展した。だが、新設大学の「生まれ出づる悩み」の例にもれず、本学もここに至る道程は決して平坦ではなかった。やや過剰表現を許してもらうならば、近代化、正常化をめざして血みどろの日々であり、紆余曲折と起伏の大きさは言語に絶するものであったといっても決して過言ではない。私は昭和四十一年からの本学開学準備に関係していただけにその感一しおである。

伊賀上先生は、その過酷なりアリズムとも言える本学の歴史と軌を逸にした。出身は四国松山、北海道の厳しい冬の風土の洗礼などはかなり深刻であったに違いない。

現在の札幌は周知の通り、人口も一七〇万人の政令指定都市。一応、地下鉄も走り、冬の除雪もまずまず、冬季間の暖房もほどよく温かく、よほどのことでもない限り短かい靴で冬期間を通すことができる。また、大学所在地の西岡は、都心から一〇軒、高級住宅地として市民の憧憬をいざない、日曜・休日の本学キャンパスは市民の憩の空間であり、大学の森は四季折々の彩りをもって人々の目を楽しませてくれる。

だが、伊賀上先生が赴任された昭和四十二年の札幌の人口は八四万四千余、その上、ここ、西岡はかろうじて人家が点在し、速達・駅小荷物は配達区域外、買物も一日、数本のバスを利用して三軒の月寒まで（校宅が大学よりさらに遠距離にあった）、道路は春先になるとまさに泥濘よろしく悪路の極、小学校も現在は既存の西岡小に加えて西岡南、西岡北、計五八学級、児童数も一九三七名に膨張、しかし、四十二年は札幌市の僻地校指定で複式の七〇余名、この一事だけでも発展変容の様相が肯づけよう。時に伊賀上先生は齢四十五歳、社会的にも最も中心的存在、札幌大学への赴任は一つの転機として内心大いなる夢と期待を抱いて来られただけに胸中もろもろの思いが去来したはずだ。幸福とは旅を

する方法であつて目的ではないことを重々承知していても……。

物事の長短は往々にして同一線上にある。いま述べたように、当時の西岡の地は生活空間としてはマイナス面が多かつた。まして東京生活との比較においておや……である。だが反面、大都會では想像できない自然があり、人情とおおらかさがあつた。札幌景勝の一つ「羊ヶ丘」の西隣りの故か、赤いサイロの牛舎、放牧されて草を食む牛・羊の群れ……都心にさほど遠くない位置としては珍しい牧歌的風景が残つていた。春の山桜・コブシ・リンゴ・梨など果樹の可憐な花とかおり、郭公の声と雲雀に鶯……秋のリンゴのたわなみのり、道を歩きながら失敬しても良心の責めを感じないのどかさがあつた。このように目で見、耳を楽しみませる田園的抒情も捨てがたかつた。

眼下に眺望の開ける札幌の夜の灯、朝な夕な姿表情を変え、四季の彩りをいち早く伝える藻岩山や近郊の手稲、無意根、そして恵庭岳の山々も俳人伊賀上泉氏（雅号）の心奥にも時には灯となつて映つたこともあつたかもしれない。ついでながら触れると、札幌大学を西岡の地に決定したのは先見の明と関係者の一人として自負している。当時、道立図書館、自治研修所等々、いわゆる江別文京地区構想がにぎにぎしかつた。ところが、彼の地には広大な土地確保が困難であつたことが幸した。西岡は国道三六号と二三〇号の三角地点、札幌の中心地まで約一〇料の高台で緑豊かな閑静の地……もつとも当時は閑静しすぎたが――。

しかし、開学初年度は余りに忙しすぎた。学内的には未分化の「近代以前」であるだけに学内運営一つ取つてみても、視点観点の相違が軋轢を結果することも少なくなかつた。一方、伝統はもちろんのこと、実績皆無の新設大学としては入試政策の一環としての高校訪問も避けられない。

四十二年開学の経済学部、外国語学部といった既存の学部は言うに及ばず、四十三年開設を目ざしての経営学部・女

子短大（英文・国文）の紹介もまた自明のことである。

真冬の道東はとにかく寒かった。現在と違って冬期の道路除雪はなく、スノータイヤもちらほらといったところ、運行間隔の大きいバス停で、しかもマイナス二十度を超す吹雪の時など「八甲田山雪中行軍」と伊賀上先生とつぶやいた記憶も鮮明である。

私は四十一年の十二月から一月・二月と全道の高校を歩いた。認可内示が十二月二十二日、学生募集はそれ以降とならざるを得なかったからだ。地元出身の私でさえマイナス二・三十度は初体験である。何故に私がこのようなことを……と己れの心に問うたことも一再ならず——。伊賀上先生と歩いた十勝・釧路・根室。わけても根室で「氷が啼く」のこぼを耳にしたのも初めてであった。この詩的抒情的な表現も詩や俳句の世界へ昇華させる余裕はなかったのではないか。早朝、十勝のあるバス停、始発ゆえかドアが開けたままになっている。しめてはどうかと運転手に声をかけたところ、「今日は、それでも少しぬく……」の語が返ってきた。聞けばマイナス二十六度とか。この現象はたまたま遭遇した一コマかも知れない。人間の気候風土に対する順応性に驚くとも共に、これらの事どもに伊賀上先生は一言も不平不満を漏らさなかった。

世の中に「半分開いて半分閉じる」——閉じることによって逆に芳香を漂わせるの喩えがある。この開き過ぎもせず、さりとして閉じ過ぎもしない。人間関係の程よい距離感……とにかく伊賀上先生は自己顕示なし、吹聴なし、過度の主張や誇大表現なし……寒かったですね……伊賀上先生とはこういう人だ。

二 抒情と叙事の距離——公と私の狭間

われわれ大学教員に与えられた責めとして、教育・研究は言うまでもない。だが、いま一つ学内行政と社会的貢献がある。

ところで後者の方は、年齢、経験等々によつて比重が異なるがとにかく厄介である。本来の教育研究の時間やエネルギーが削減され、運営面ではスタッフとラインの狭間で、また、私学では法人と教学の関係をどう調整するか、しかもこれがうまくいって当り前……ということになる。

大学人の世界で、これを「雑用」という語すら定着し、あまつさえ、学会などで研究一辺倒の集団からは「事務教授」という侮蔑的ニュアンスのことばをちようだりするのには周知の事実である。

だが、誰かがしなければ大学として機能しない。私は、全員での機能分担を説き、その具体策の一つとして「打者一巡」方法と、一度、役割を果たした人の辞退意思尊重の制度化を主張したことがある。

伊賀上先生も民主主義という美名の下、時には個人の意思を抑圧する選挙によつて数々の役職を余儀なくした。まず、入試委員長、図書館長、教養部長、教務部長、そして法人理事・評議員等々。

大学は言うまでもなく、学部オートノミーで、いわゆる縦社会ではない。だが、その中にあつても時には立場上「泣いて馬鹿を切る」ことも起り得る。そのような事があれば、当然、人間関係にも影響が出る。世の中は、立場を通してその人柄を問われることもあり、また、水戸光圀の処世訓ではないが「人間本来、物に執ぜざること」、つまり、立場、肩書と自分との区別がつかなくなることの戒めもある。

伊賀上先生はその片鱗も見られなかった。とにかく「忍」の一字でその責めを果たされた。これは強靱な意思と謙虚な人柄以外の何ものでもない。

三 生と死の極限——凝視と彷徨

伊賀上先生は大正十一年一月二十二日生まれ。日本近代史の地図を塗り変える戦前、戦中、戦後の渦中を生き抜いてきた。しかも、一貫してリベラルな生き方を堅持されたのは特筆に価する。

幸佐真

当時、成人を迎えることは「死」に直面することを意味していた。また、戦局が厳しくなった昭和十七、八年になると、十四、五歳の少年までもが軍の学校へ強制入校させられた。今日、戦争を語り継ぐ会が活発である。むろん、その精神は理解できる。だが、われわれ体験者は語りたがらない。適切な言葉がみつからないもどかさも否定できないが、母国の、そして肉親たちのしあわせを信じて死地に赴いた先輩、僚友への原罪性にも似たある種のうしろめたさ、罪譴意識とでも形容するとよいのであるうか。伊賀上先生とは、とにかく軍隊時代のことを話し合った記憶がない。

村木

伊賀上先生も時代の制約に免がれず、昭和十八年の十月、あの雨の神宮球場壮行会から学徒出陣、陸軍特別操縦見習士官としてやがて特攻基地へ赴くべく日夜激しい訓練に明けくれていた。今回、はじめてガリ板刷りの創作「ニワトリの歌」に接することができた。その中には、人間をモノとして扱う戦争の非情の苦悶、そして青春を飛行機と共に送り、その飛行機が仲間を死地へ運ぶ道具と化したことへの悲痛な慟哭と、僚友小松の姉へのほのかな思慕を含める先のない青春の哀歓を主人公「健」に語らせている。

では「ニワトリの歌」とは何か——詳しく紹介する紙幅がないのでその一部をあげると、特攻隊……「実は私も、特

攻隊を志願して、許された。率直に云うと、私はこの決心をするまでに、幾晩も眠れず、苦しみ、考え、迷った。しかし国家が求めているのだ。私は、私のあとに続く者のあることを信じている。たとえどんなにおそろしくとも、真青になつてガタガタふるえながらも、敵艦めがけてつつ込んでゆければ、それで立派なのだ——」。これは、ふだん苦みばしつた隊長の偽らざる真情の吐露であつた。健は、ここに自分と同じ座標に立つ人間隊長の真実の姿を見た。しかし「震えながらも、真青になりながらも……：：：：そうなのだろうか。俺たちには、眠らずに考え、懊悩する時間と自由さえないのではないか……」。まさに「ニワトリ」そのものである。

その後、南方の戦局が一段と重大化し、ガソリン使用も極度に制限された。その結果、特別操縦見習士官は、特定の者を除いて、当分の間、飛行訓練が中止された。健は特攻要員予選のためのテスト飛行の折、ふと襲つた眩暈のため、操縦桿を引くのがほんの一瞬おくれた。つまりこれで、「特定の者」からはずされたのだ。

健は、「おれはもう二度と飛行機に乗ることはあるまい——健は夢や迷信などあまり気にしないのであつたが、何故か、今はしきりにそう思つていた。きつと、もう、おれは乗るまい。それが、どういう意味なのか、よくわからなかつた。それにも拘らず、ただもう自分にそんな風に言いきかせていた。すると全く久しく忘れていた大学の古い健物や、時計塔をかくして茂つた銀杏並木が浮かんできたが、それはしかし遙かに遠く、夏の陽炎にきらきらと燃えて、またたく間に消えてゆくのであつた。」

創作「ニワトリの歌」の結びである。創作であることは言うまでもない。だが、ここに託されている生と死への凝視と彷徨が、抑制された表現ゆえ、かえつてその「ニワトリ」の現実感が行間に溢れ、余韻となつて心に沈潜して離れない。このように思うのは、ややこれに似た体験をもつ人間の悲しき性^{さが}であろうか——。

四 生のドラマ——一貫してリベラルに

随筆に「煙草とボタン」がある。

「深夜、硬貨を握って煙草を買いに出る。昼間買っておくとよかったのに、などと多少後悔しながら、そこだけ明るさ灯っている自動販売機を想像して、下駄を踏みしめるようにして歩いてゆく。さて、投入口を確めて金を入れ、おもむろに銘柄を選んで、そのボタンを押す……しかし、何の反応もない。何度か押す。やはり、だめである。返却ボタンなるものを押してみる。チャリンとも言わない。二度三度あちらを押ししたりこちらを叩いたり、あげくの果ては足で蹴とばしてみたりする。ダメ。よくみると販売機の裾の方が凹んでいる。百円やそこらのことで、店の人を叩き起すわけにもいかない。さりとて翌日、昨夜かくかくで……も煩わしい。別の販売機は何里も行かなければならない。しかも硬貨の用意がない。」

名文を勝手に要約した責めは免れないが、このようなことは多かれ少なかれ人々が体験していることである。筆者はつづけて、「今度は少し下駄の音を荒らかに歩き返しながら、狐におあつらえむきの半月を横目に見やりあることに気が付いて、はっと立ち留る。」ここから先が伊賀上先生の人柄がにじみ出て微笑を誘う。

「自動販売機だって、夜昼問わず働かされていては飽きもするだろうし、煙草も吸いたくなくなるだろう。設置した会社の職員が差入れでもしてくれない限り、販売機としては自衛策をとるほかない。ああやって客から取り上げた金で煙草を吸ったり、となりの販売機からジュースを取りよせて飲んだりしているのではあるまいか。そうしなければ俺だって体がもたない、死んじゃうよ。という声が聞えてくるような気がした。」とある。

多くの説明を要さない。感情のない自動販売機への感情移入と擬人化的視座——自分と同位置に置きかえてのユーモア巧みな表現の中に愛情があり、ペーソスがある。

筆はさらにすすんで地下鉄の自動改札機へ及ぶ。

「ぼくはあそこを通る度に、今にも通路の両側から大きな手の様な扉がさつと伸びて、搦め捕らわれるのではなからうかという恐怖を持つ。」そして実際に「改札口を出ようとした時に、パタンとやられた」。駅員の尋問にこちらは被告のように、これこれと答えたが、駅員が鍵で改札口を開けると、ぼくの入れた切符は、もとから其処にひっかかっていたらしい一枚の切符の上に折れ曲って詰っていた」のである。

「自動改札機は、毎日毎日自分の中を素通りしてばかり行く切符に腹を立て、ちよつと悪戯を試みたのかも知れない。それとも、仕事を機械に任せっぱなしにして、所在なさに雑談したり、腕組みして居眠りしたり、煙草を吸ったりしている駅員に仕事を与えてやりたかつたのかもしれない。」

みごとな諷刺である。人生の真髓が澁みなく表現されて胸の透く思いである。そしてこれらの帰結として、「人間が生きて行くために、核戦争というようなことは仮りに避けられても、親子喧嘩とか嫁と姑の争いとかからは逃られまい。パチンコの玉が出ないとか、隣のピアノの音がうるさいとか、そういう一切の瑣事の彫大量の集積によって、十重二十重に人間は包囲されている。窒息したり狂ったりすることから逃れようとしても、もう自分自らを消滅させるより他に方法はないかに見える状況にあるのが人生というものである。そう悟った時、詩が生れ絵が出来ると言われるが、果してそうなのか。少くとも『俳句』をこの別乾坤に置くことにぼくは躊躇を感じる。俳句は人生に対置するには余りにも矮小だし、同時に核の如く巨大なエネルギーを持ち過ぎているからだ。」(傍点木村)

いささか引用の長きにわたったが、ここに七〇年に恒る伊賀上先生の知情意のしがらみに対処する謙虚にして厳しく

生きる姿勢がもののみごとに語られていると思つたからである。「自分自らを消滅させ……」余人には簡単にできることではない。だが、伊賀上先生はこれを確実に実践してきたから驚きである。「ホトケの伊賀上先生……」短大女子学生の自然発生の感嘆詞である。

五 北辺の観照とその座標——俳諧研究・自らも句作に

伊賀上先生は、子規や漱石ゆかりの地、旧制松山高校から東大文学部国文学科へ——途中、学徒出陣という生死の彷徨という過酷なリアリズムの体験を余儀なくしたが、とにかく古きよき時代のリベラルな学生生活の一側面があつたのはしあわせといえよう。

木村真佐幸 研究分野は上代から現代までと実に範囲が広く、しかもあらゆる面に精通している。特に近世文学を中心に西鶴、芭蕉、西行、はたまた「古今集における俳諧歌の位相」と周辺を広げ、一方、現代俳句の中、「ホトトギス・石楠系の作家たち」と、人間探求派と呼ばれる現代俳人の代表作家の一人、「森澄雄論」、あるいは北海道にも足跡をのびし、道内各地にその句碑建立をみる伊賀上先生の俳句の師、白田亜浪の「亜浪私論」と一貫して俳諧研究に情熱を注ぎ、その成果は学界でも光彩を放っている。

また、伊賀上泉のペンネーム「春の旅から——俳句と自然（その一）」というさわやかな名文があるが、既に紙幅を費したので割愛させていただく。

すでに触れたように、本人も例のペンネームで「密」（「密発行所」東京都目黒区中井町二―八―一四）の同人としてすぐれた俳句を発表している。俳人伊賀上泉論は、詩どころ、歌どころの乏しい私の視界では距離がありすぎるので、

その道の熟練達の上でおられる本学法学部吉田明教授にお願いした。

吉田先生は周知の通り、俳誌「沖」の同人で奥様共々すぐれた作品を発表され、また、俳句の鑑賞批評の第一人者である。お忙しいところ快くお引きうけくださって玉稿をお寄せいただき、伊賀上先生を送ることばに花を添えてくださった。ここに記して謝意を表する次第である。

(一九九二・三・三一)